

加齢黄斑変性に対する個別化医療実現のための前向き臨床研究にもとづく
ゲノムワイド関連解析

研究分担者 山城 健児 京都大学医学研究科講師

研究要旨

加齢黄斑変性（AMD）は先進国における社会的中途失明の最大の原因となっており、複数ある治療方法から最適の治療方法を選択できずに試行錯誤を繰り返す数ヶ月の間に進行してしまうことが多い。各患者に最適な治療方法を選択し、早期にその治療を開始することができれば、重症化の防止、QOLの向上・自立支援につながるだけでなく、医療経済上の問題の改善にもつながる。

このような個別化医療の実現のために、遺伝子多型が活用できる。本研究では日本人独自の遺伝子多型を用いた個別化医療を実現するために多施設前向き研究を行う。平成23年度には国内の15の施設と共同で抗VEGF治療の前向き研究を開始するとともに、これまでに光線力学療法を行ってきた症例を集めて、光線力学療法の治療効果に相関する遺伝子多型を解明するためのゲノムワイド関連解析を開始した。

A．研究目的

加齢黄斑変性（AMD）は先進国における社会的中途失明の最大の原因となっており、我が国でも近年急速に増加している疾患である。最近になって光線力学療法や硝子体注射薬といった治療方法が開発され、加療可能な疾患となってきたが、これらの治療方法の効果は視力を回復させるには十分ではない。患者ごとに各治療方法の効果が異なることから、これら複数の治療方法から各患者に最適な治療方法を選択することができれば、各患者における重症化の防止、QOLの向上・自立支援につながり、さらに医療費の抑制にもつながると考えられる。

近年、AMDの発症や治療結果に遺伝子（CFH、ARMS2等）の多型が関与することが分かってきたため、この遺伝子多型を用いて個別化医療を実現しようという気運が高まってきた。本研究では遺伝子多型を用いた個別化医療の精度の向上によって適切なAMDの治療を目指し、同時に不必要な治療や通院の抑制を測りたい。

我々のこれまでの研究から、欧米人と日本人とでは関与する遺伝子多型の強弱に差があることが分かりつつある。つまり遺伝子多型を用いて個別化医療を実現するためには、日本人におけるAMDに関与する遺伝子多型の研究が不可欠であると考えられる。

我々は既にARMS2遺伝子のA69S多型の迅速キットを作成し、実際の臨床治療に利用し始めている。また、これまでの我々の研究ではARMS2、CFH、VEGF、PEDFといった遺伝子の多型が様々な治療による予後に影響していることが分かってきた。しかし、他にも治療効果に影響する遺伝子多型は複数存在するはずで、本研究ではこれまでの研究成果を前向き研究を行うことによって確固としたもの

にしていくと同時に、ゲノムワイド関連解析を行うことによって新たな相関遺伝子多型を明らかにしていく。

平成23年度には国内約15施設でこれまでに光線力学療法を施行されてきた患者の治療経過を参考に、血液サンプルを用いてゲノムワイド関連解析を行うことによって、光線力学療法の治療結果に相関する遺伝子多型を解明し、また抗VEGF薬による治療結果に相関する遺伝子多型を検出するための前向き研究を開始した。平成24年度には前向き研究の治療結果を参考にゲノムワイド関連解析を行って、抗VEGF薬による治療結果に相関する遺伝子多型を明らかにした。平成25年度には治療方針を決定するために有用な遺伝子多型について再現性を確認し、その有用性を検証した。さらに遺伝子多型の迅速検出キットを作成し、個別化医療の精度の向上を目指した。

B．研究方法

AMD個別化医療研究会参加施設（京大、神戸大、埼玉医大、東京医療センター）および協力施設（福島医大、群馬大、山梨大、東大、名市大、阪大、関西医大、島根大、聖隷浜松病院、大塚眼科、宮田眼科）で臨床研究を進めてきた。

これまで主力の治療方法であった光線力学療法および、平成22年春頃から使用が開始されてきた抗VEGF薬による治療後の反応・予後と相関する遺伝子多型をゲノムワイド関連解析の手法を用いて解明した。光線力学療法についてはこれまでに多数例の治療データが各施設に蓄積されているため、まず始めに後ろ向き研究を行うことで、相関遺伝子多型を解明した。抗VEGF薬治療については各施設から患者登録を行い、前向き研究を行い、

ゲノムワイド関連解析の結果、抗VEGF治療の反応性を予測出来る可能性のある候補遺伝子の発見に成功した。各治療方法を行った際の反応・予後を予測するために有用な遺伝子多型を検出する迅速キットを作成し、キットを用いて各患者に最適な治療方法を選択し、実際に個別化医療を行ったうえで、その成果の検証を試みた。

【前向き研究 - 抗VEGF治療】

すべての施設での倫理委員会の承認を得た後、各施設で20-30例程度のエントリーを行い、通常の抗VEGF治療を順次行った。治療開始前の必須検査は視力検査、眼底検査、造影検査、光干渉断層計検査とし、治療後は毎月視力検査、眼底検査、光干渉断層計検査を行い臨床経過を記録した。末梢血サンプルは、連結可能匿名化を行ったあとにDNA抽出を行い、ゲノムワイド関連解析の準備を行った。

ゲノムワイド関連解析から得られた治療結果に相関する候補遺伝子多型を20程度に絞り、残りの300例程度のサンプルを用いて4施設でTaqman法によって候補遺伝子多型を検出し、その相関を検証した。

平成24年度内には、1年以上の経過が追えた患者が256例を超えたため、その256例のDNAサンプルと臨床経過（治療の有効性、視力予後、再発の有無）を用いてゲノムワイド関連解析を行った。有力な候補遺伝子が発見できたため、平成25年度には残りの登録済みサンプルを用いてその関連を検証した。またARMS2遺伝子のA69S多型を検出するキットを改良し、すべての施設で検査可能にした。

【後ろ向き研究 - 光線力学療法】

各施設で光線力学療法を施行し、1年以上の経過観察が可能であった患者に対して、本研究の説明を行い、協力が得られた患者から同意のうえで血液サンプルを採取し、連結可能匿名化を行ったあとにAMD個別化医療研究会参加施設（京大、神戸大、埼玉医大、東京医療センター）に血液サンプルを送付し、DNA抽出を行い、抽出されたDNAを京大眼科に送付した。上述の抗VEGF治療の反応性に相関を認めた遺伝子について、各施設から得られた治療結果（有効性、視力予後、再発の有無）を参考に、治療結果に影響を与えうるかどうかを検証した。

（倫理面への配慮）

平成23年度中に本研究の協力施設15施設のすべてにおいて、倫理委員会の承認が得られた。

末梢血の採取は通常の臨床静脈採血と同様の方法で行われるので、それに伴う身体的・精神的不利益は小さいと考えられるが、採血時の身体的損傷・反応（まれにみられる迷走神経反射など）に対しては臨床的に適切とみなされる処置を遅滞なく行うことにしている。

遺伝子解析結果自体による倫理的・法的・社会的な不利益は匿名化・情報管理の体制により防止する。また遺伝子解析を行うことに伴

う心理的不利益に対してはヒト由来試料等採取機関により相談・情報提供の機会を提供する。

C. 研究結果

【前向き研究 - 抗VEGF治療】

すべての施設での倫理委員会の承認を得た後、web上に作成した症例登録用ページに登録を開始し、登録を続けている。256例を用いた研究で有力な候補遺伝子が発見できた。H25年度には再現性確認用に登録された200例を用いて再現性を確認したところ、7番染色体上の遺伝子について、統計学的に有意な関連は認めなかったが、同様の関連傾向を認めており、AMDの個別化医療に有用である可能性が高いと考えられる。

【後ろ向き研究 - 光線力学療法】

光線力学療法を施行済みの96例からDNAを抽出し、イルミナ社の2.5Mチップを用いた一塩基多型の検出が可能であった。現在、治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子を解明するために、ゲノムワイド関連解析を行っているが症例数が少なく、有意な遺伝子多型が発見出来なかった。抗VEGF治療の研究から得られた候補遺伝子についても有意な関連を認めなかった。

D. 考察

抗VEGF治療の治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子の候補が見つかったと考えている。一方、光線力学療法については上述の遺伝子と治療反応性・治療予後との関連は認められなかったため、光線力学療法については既に知られているARMS2遺伝子の活用した個別化医療を行っていくべきであろう。

E. 結論

光線力学療法および抗VEGF抗体治療の治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子が解明され、加齢黄斑変性の個別化医療の実現が近づいた。

F. 研究発表

1. 論文発表

Coscas G, Yamashiro K, Coscas F, De Benedetto U, Tsujikawa A, Miyake M, Gemmy Chung CM, Wong TY, Yoshimura N. Comparison of Exudative Age-related Macular Degeneration Subtypes in Japanese and French Patients: Multi-center diagnosis with multimodal imaging. *Am J Ophthalmol*. 2014 May 17. pii: S0002-9394(14)00238-4. doi: 10.1016/j.ajo.2014.05.004. [Epub ahead of print]

Miyake M, Tsujikawa A, Yamashiro K, Ooto S, Oishi A, Nakata I, Tamura H, Matsu da F, Yoshimura N. Choroidal Neovascularization in Eyes with Choroidal Vascular Hyperpermeability. *Invest Ophthalmol Vis Sci*. 2014 Apr 29. pii: iovs.14-14059v1. doi: 10.1167/iov

s.14-14059. [Epub ahead of print]

Ueda-Arakawa N, Ooto S, Ellabban AA, Takahashi A, Oishi A, Tamura H, Yamashiro K, Tsujikawa A, Yoshimura N. Macular choroidal thickness and volume of eyes with reticular pseudodrusen using swept-source optical coherence tomography. *Am J Ophthalmol*. 2014 May;157(5):994-1004.

Ogino K, Tsujikawa A, Yamashiro K, Ooto S, Oishi A, Nakata I, Miyake M, Takahashi A, Ellabban AA, Yoshimura N. Multimodal evaluation of macular function in age-related macular degeneration. *Jpn J Ophthalmol*. 2014 Mar;58(2):155-65.

Oishi M, Yamashiro K, Miyake M, Akagi-Kurashige Y, Kumagai K, Nakata I, Nakanishi H, Yoshikawa M, Oishi A, Gotoh N, Tsujikawa A; Nagahama Study Group, Yamada R, Matsuda F, Yoshimura N. Association between ZIC2, RASGRF1, and SHISA6 genes and high myopia in Japanese subjects. *Invest Ophthalmol Vis Sci*. 2013 Nov 13;54(12):7492-7.

Ooto S, Ellabban AA, Ueda-Arakawa N, Oishi A, Tamura H, Yamashiro K, Tsujikawa A, Yoshimura N. Reduction of retinal sensitivity in eyes with reticular pseudodrusen. *Am J Ophthalmol*. 2013 Dec;156(6):1184-1191.

Miyake M, Yamashiro K, Akagi-Kurashige Y, Kumagai K, Nakata I, Nakanishi H, Oishi A, Tsujikawa A, Yamada R, Matsuda F, Yoshimura N. Vascular endothelial growth factor gene and the response to anti-vascular endothelial growth factor treatment for choroidal neovascularization in high myopia. *Ophthalmology*. 2014 Jan;121(1):225-33.

Nakata I, Yamashiro K, Kawaguchi T, Gotoh N, Nakanishi H, Akagi-Kurashige Y, Miyake M, Tsujikawa A, Oishi A, Saito M, Iida T, Yamada R, Matsuda F, Yoshimura N; Nagahama Study Group. Association between the cholesteryl ester transfer protein gene and polypoidal choroidal vasculopathy. *Invest Ophthalmol Vis Sci*. 2013 Sep 9;54(9):6068-73.

Nakata I, Yamashiro K, Nakanishi H, Akagi-Kurashige Y, Miyake M, Tsujikawa A, Matsuda F, Yoshimura N; Nagahama Cohort Research Group. Prevalence and characteristics of age-related macular degeneration in the Japanese population: the Nagahama study. *Am J Ophthalmol*. 2013 Nov;156(5):1002-1009.

Khor CC, Miyake M, Chen LJ, Shi Y, Barathi VA, Qiao F, Nakata I, Yamashiro K, Zhou X, Tam PO, Cheng CY, Tai ES, Vithana EN, Aung T, Teo YY, Wong TY, Moriyama M, Ohno-Matsui K, Mochizuki M, Matsuda F; Nagahama Study Group, Yong RY, Yap EP, Yang Z, Pang CP, Saw SM, Yoshimura N. Genome-wide association study identifies ZFH1B as a susceptibility locus for severe myopia. *Hum Mol Genet*. 2013 Dec 20;22(25):5288-94.

Miyake M, Yamashiro K, Nakanishi H, Nakata I, Akagi-Kurashige Y, Tsujikawa A, Moriyama M, Ohno-Matsui K, Mochizuki M, Yamada R, Matsuda F, Yoshimura N. Insulin-like growth factor 1 is not associated with high myopia in a large Japanese cohort. *Mol Vis*. 2013 May 21;19:1074-81.

Miyake M, Yamashiro K, Nakanishi H, Nakata I, Akagi-Kurashige Y, Kumagai K, Oishi M, Tsujikawa A, Moriyama M, Ohno-Matsui K, Mochizuki M, Yoshimura N. Evaluation of pigment epithelium-derived factor and complement factor I polymorphisms as a cause of choroidal neovascularization in highly myopic eyes. *Invest Ophthalmol Vis Sci*. 2013 Jun 19;54(6):4208-12.

Ogino K, Tsujikawa A, Yamashiro K, Ooto S, Oishi A, Nakata I, Miyake M, Yoshimura N. Intravitreal injection of ranibizumab for recovery of macular function in eyes with subfoveal polypoidal choroidal vasculopathy. *Invest Ophthalmol Vis Sci*. 2013 May 1;54(5):3771-9.

2. 学会発表

三宅正裕、山城健児、中西秀雄、仲田勇夫、赤木由美子、熊谷京子、大石真秀、辻川明孝、山田亮、松田文彦、吉村長久 ゲノムワイド一塩基多型で説明しうる近視のheritability 第117回日本眼科学会総会 2013.4.4-7 東京

三宅正裕、山城健児、中西秀雄、赤木由美子、大石明生、後藤謙元、辻川明孝、齊藤昌晃、栗本康夫、山田亮、松田文彦、吉村長久 加齢黄斑変性に対するルセンティス治療に関する多施設前向きゲノムワイド関連解析 第67回日本臨床眼科学会 2013.10.31-11.3 横浜

G. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし

3.その他
なし

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
総括研究報告書

加齢黄斑変性に対する個別化医療実現のための前向き臨床研究にもとづく
ゲノムワイド関連解析

研究分担者 本田 茂 神戸大学医学研究科講師

研究要旨

加齢黄斑変性（AMD）は先進国における社会的中途失明の最大の原因となっており、複数ある治療方法から最適の治療方法を選択できずに試行錯誤を繰り返す数ヶ月の間に進行してしまうことが多い。各患者に最適な治療方法を選択し、早期にその治療を開始することができれば、重症化の防止、QOLの向上・自立支援につながるだけでなく、医療経済上の問題の改善にもつながる。

このような個別化医療の実現のために、遺伝子多型が活用できる。本研究では日本人独自の遺伝子多型を用いた個別化医療を実現するために多施設前向き研究を行う。本施設からはこれまでに光線力学療法を行ってきた症例のDNAを抽出して、京大でのゲノムワイド関連解析に使用したとともに、抗VEGF治療の前向き研究のための症例登録を開始した。

A．研究目的

これまでに光線力学療法を施行されてきた患者の治療経過を参考に、血液サンプルを用いてゲノムワイド関連解析を行うことによって、光線力学療法の治療結果に相関する遺伝子多型を解明し、また抗VEGF薬による治療結果に相関する遺伝子多型を検出するための前向き研究を開始した。

B．研究方法

【後ろ向き研究 - 光線力学療法】

光線力学療法を施行し、1年以上の経過観察が可能であった患者に対して、本研究の説明を行い、協力が得られた患者から同意のうえで血液サンプルを採取し、連結可能匿名化を行ったあとにDNA抽出を行い、抽出されたDNAとともに臨床経過を京大眼科に送付した。

【前向き研究 - 抗VEGF治療】

倫理委員会の承認を得たうえで症例登録を行い、通常の抗VEGF治療を順次行った。20例のサンプルについてはDNA抽出を行い、臨床経過とともに再現性確認のために京都大学にDNAサンプルを送付した。

（倫理面への配慮）

倫理委員会の承認が得たのちにインフォームドコンセントを得て、末梢血採血を行った。

末梢血の採取は通常の臨床静脈採血と同様の方法で行われるので、それに伴う身体的・精神的不利益は小さいと考えられるが、採血時の身体的損傷・反応（まれにみられる迷走神経反射など）に対しては臨床的に適切とみなされる処置を遅滞なく行うことにしている。

遺伝子解析結果自体による倫理的・法的・社会的な不利益は匿名化・情報管理の体制によ

り防止する。また遺伝子解析を行うことに伴う心理的不利益に対してはヒト由来試料等採取機関により相談・情報提供の機会を提供した。

C．研究結果

DNA抽出を行い、京大でゲノムワイド関連解析およびその再現性確認を行うために臨床経過とともに送付した。

D．考察

抗VEGF治療の治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子の候補がみつかったと考えている。一方、光線力学療法については上述の遺伝子と治療反応性・治療予後との関連は認められなかったため、光線力学療法については既に知られているARMS2遺伝子の活用した個別化医療を行っていくべきであろう。

E．結論

光線力学療法および抗VEGF抗体治療の治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子が解明され、加齢黄斑変性の個別化医療の実現が近づいた。

F．研究発表

1. 論文発表

Shimoyama T, Imai H, Honda S, Negi A. A case of choroidal neovascularization secondary to unilateral retinal pigment epithelium dysgenesis. Case Rep Ophthalmol. 2014 Jan 22;5(1):34-7.

Oishi A, Miyamoto N, Mandai M, Honda S, Matsuoka T, Oh H, Kita M, Nagai T, Besho N, Uenishi M, Kurimoto Y, Negi A. L APTOP Study: A 24-Month Trial of Vertep

orfin Versus Ranibizumab for Polypoidal Choroidal Vasculopathy. Ophthalmology. 2014 May;121(5):1151-2.

Miki A, Kondo N, Yanagisawa S, Bessho H, Honda S, Negi A. Common variants in the complement factor h gene confer genetic susceptibility to central serous chorioretinopathy. Ophthalmology. 2014 May;121(5):1067-72. doi: 10.1016/j.ophtha.2013.11.020. Epub 2013 Dec 21.

Honda S, Matsumiya W, Negi A. Polypoidal choroidal vasculopathy: clinical features and genetic predisposition. Ophthalmologica. 2014;231(2):59-74.

Oishi A, Kojima H, Mandai M, Honda S, Matsuo T, Oh H, Kita M, Nagai T, Fujihara M, Bessho N, Uenishi M, Kurimoto Y, Negi A. Comparison of the effect of ranibizumab and verteporfin for polypoidal choroidal vasculopathy: 12-month LAPT OP study results. Am J Ophthalmol. 2013 Oct;156(4):644-51.

Miki A, Honda S, Nagai T, Tsukahara Y, Negi A. Effects of oral bisphosphonates on myopic choroidal neovascularisation over 2 years of follow-up: comparison with anti-VEGF therapy and photodynamic therapy. A pilot study. Br J Ophthalmol. 2013 Jun;97(6):770-4.

Matsumiya W, Honda S, Kusuhara S, Tsukahara Y, Negi A. Effectiveness of intravitreal ranibizumab in exudative age-related macular degeneration (AMD): comparison between typical neovascular AMD and polypoidal choroidal vasculopathy over a 1 year follow-up. BMC Ophthalmol. 2013 Apr 4;13:10.

Miki A, Honda S, Kojima H, Nishizaki M, Nagai T, Fujihara M, Uenishi M, Kita M, Kurimoto Y, Negi A; Hyogo Macular Disease Study Group. Visual outcome of photodynamic therapy for typical neovascular age-related macular degeneration and polypoidal choroidal vasculopathy over 5 years of follow-up. Jpn J Ophthalmol. 2013 May;57(3):301-7.

2. 学会発表

柳沢翠芳、三木明子、松宮亘、近藤直士、本田茂、塚原康友、根木昭 日本人の成人発症卵黄状黄斑ジストロフィーにおけるRDS 遺伝子多型の検討 第117回日本眼科学会総会 2013.4.4-7 東京

本田茂、柳沢翠芳、三木明子、松宮亘、長井

隆行、塚原康友 ポリプ状脈絡膜血管症に対する光線力学療法の治療効果に関連する因子の検討 第67回日本臨床眼科学会 2013.10.31-11.3 横浜

G . 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

加齢黄斑変性に対する個別化医療実現のための前向き臨床研究にもとづく
ゲノムワイド関連解析

研究分担者 米谷 新 埼玉医科大学医学研究科教授

研究要旨

加齢黄斑変性（AMD）は先進国における社会的中途失明の最大の原因となっており、複数ある治療方法から最適の治療方法を選択できずに試行錯誤を繰り返す数ヶ月の間に進行してしまうことが多い。各患者に最適な治療方法を選択し、早期にその治療を開始することができれば、重症化の防止、QOLの向上・自立支援につながるだけでなく、医療経済上の問題の改善にもつながる。

このような個別化医療の実現のために、遺伝子多型が活用できる。本研究では日本人独自の遺伝子多型を用いた個別化医療を実現するために多施設前向き研究を行う。本施設からはこれまでに光線力学療法を行ってきた症例のDNAを抽出して、京大でのゲノムワイド関連解析に使用したとともに、抗VEGF治療の前向き研究のための症例登録を開始した。

A．研究目的

これまでに光線力学療法を施行されてきた患者の治療経過を参考に、血液サンプルを用いてゲノムワイド関連解析を行うことによって、光線力学療法の治療結果に相関する遺伝子多型を解明し、また抗VEGF薬による治療結果に相関する遺伝子多型を検出するための前向き研究を開始した。

B．研究方法

【後ろ向き研究 - 光線力学療法】

光線力学療法を施行し、1年以上の経過観察が可能であった患者に対して、本研究の説明を行い、協力が得られた患者から同意のうえで血液サンプルを採取し、連結可能匿名化を行ったあとにDNA抽出を行い、抽出されたDNAとともに臨床経過を京大眼科に送付した。

【前向き研究 - 抗VEGF治療】

倫理委員会の承認を得たうえで症例登録を行い、通常の抗VEGF治療を順次行った。17例のサンプルについてはDNA抽出を行い、臨床経過とともに再現性確認のために京都大学にDNAサンプルを送付した。

（倫理面への配慮）

倫理委員会の承認が得たのちにインフォームドコンセントを得て、末梢血採血を行った。

末梢血の採取は通常の臨床静脈採血と同様の方法で行われるので、それに伴う身体的・精神的不利益は小さいと考えられるが、採血時の身体的損傷・反応（まれにみられる迷走神経反射など）に対しては臨床的に適切とみなされる処置を遅滞なく行うことにしている。

遺伝子解析結果自体による倫理的・法的・社会的な不利益は匿名化・情報管理の体制によ

り防止する。また遺伝子解析を行うことに伴う心理的不利益に対してはヒト由来試料等採取機関により相談・情報提供の機会を提供した。

C．研究結果

DNA抽出を行い、京大でゲノムワイド関連解析およびその再現性確認を行うために臨床経過とともに送付した。

D．考察

抗VEGF治療の治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子の候補がみつかったと考えている。一方、光線力学療法については上述の遺伝子と治療反応性・治療予後との関連は認められなかったため、光線力学療法については既に知られているARMS2遺伝子の活用した個別化医療を行っていくべきであろう。

E．結論

光線力学療法および抗VEGF抗体治療の治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子が解明され、加齢黄斑変性の個別化医療の実現が近づいた。

F．研究発表

1. 論文発表

Tsuchihashi T, Mori K, Ueyama K, Yoneyama S. Five-year results of photodynamic therapy with verteporfin for Japanese patients with neovascular age-related macular degeneration. Clin Ophthalmol. 2013;7:615-20.

2. 学会発表

米谷新、庄司拓平、土橋尊志、鈴木将之、馬場基芳、黒田寛人 高速・高解像度光干渉計によるBruch膜病変描出の可能性 第117回

日本眼科学会総会 2013.4.4-7 東京

G. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

加齢黄斑変性に対する個別化医療実現のための前向き臨床研究にもとづく
ゲノムワイド関連解析

研究分担者 岩田 岳 東京医療センター感覚器センター部長

研究要旨

加齢黄斑変性（AMD）は先進国における社会的中途失明の最大の原因となっており、複数ある治療方法から最適の治療方法を選択できずに試行錯誤を繰り返す数ヶ月の間に進行してしまうことが多い。各患者に最適な治療方法を選択し、早期にその治療を開始することができれば、重症化の防止、QOLの向上・自立支援につながるだけでなく、医療経済上の問題の改善にもつながる。

このような個別化医療の実現のために、遺伝子多型が活用できる。本研究では日本人独自の遺伝子多型を用いた個別化医療を実現するために多施設前向き研究を行う。平成23年度には国内の15の施設と共同で抗VEGF治療の前向き研究を開始するとともに、これまでに光線力学療法を行ってきた症例を集めて、光線力学療法の治療効果に相関する遺伝子多型を解明するためのゲノムワイド関連解析を開始した。

A．研究目的

これまでに光線力学療法を施行されてきた患者の血液サンプルおよび抗VEGF薬による治療を施行されてきた患者の血液サンプルからDNAを抽出する。また抗VEGF薬による治療結果に相関する遺伝子多型を検出するための前向き研究のための症例登録webページを作成した。

B．研究方法

AMD個別化医療研究会参加施設（京大、神戸大、埼玉医大、東京医療センター）および協力施設（福島医大、群馬大、山梨大、東大、名市大、阪大、関西医大、島根大、聖隷浜松病院、大塚眼科、宮田眼科）から送付された血液サンプルからDNAを抽出した。

（倫理面への配慮）

全症例の血液サンプルは連結可能匿名化を行った。

C．研究結果

血液サンプルからDNAを抽出した。症例登録webサイトは東京医療センター内のサーバーに構築した。

A．研究目的

これまでに光線力学療法を施行されてきた患者の治療経過を参考に、血液サンプルを用いてゲノムワイド関連解析を行うことによって、光線力学療法の治療結果に相関する遺伝子多型を解明し、また抗VEGF薬による治療結果に相関する遺伝子多型を検出するための前向き研究を開始した。

B．研究方法

【後ろ向き研究 - 光線力学療法】

光線力学療法を施行し、1年以上の経過観察が可能であった患者に対して、本研究の説明を行い、協力が得られた患者から同意のうえで血液サンプルを採取し、連結可能匿名化を行ったあとにDNA抽出を行い、抽出されたDNAとともに臨床経過を京大眼科に送付した。

【前向き研究 - 抗VEGF治療】

倫理委員会の承認を得たうえで症例登録を行い、通常抗VEGF治療を順次行った。20例のサンプルについてはDNA抽出を行い、臨床経過とともに再現性確認のために京都大学にDNAサンプルを送付した。

（倫理面への配慮）

倫理委員会の承認が得たのちにインフォームドコンセントを得て、末梢血採血を行った。

末梢血の採取は通常臨床静脈採血と同様の方法で行われるので、それに伴う身体的・精神的不利益は小さいと考えられるが、採血時の身体的損傷・反応（まれにみられる迷走神経反射など）に対しては臨床的に適切とみなされる処置を遅滞なく行うことにしている。

遺伝子解析結果自体による倫理的・法的・社会的不利益は匿名化・情報管理の体制により防止する。また遺伝子解析を行うことに伴う心理的不利益に対してはヒト由来試料等採取機関により相談・情報提供の機会を提供した。

C．研究結果

DNA抽出を行い、京大でゲノムワイド関連解析およびその再現性確認を行うために臨床経過とともに送付した。

D . 考察

抗VEGF治療の治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子の候補がみつかったと考えている。一方、光線力学療法については上述の遺伝子と治療反応性・治療予後との関連は認められなかったため、光線力学療法については既に知られているARMS2遺伝子の活用した個別化医療を行っていくべきであろう。

E . 結論

光線力学療法および抗VEGF抗体治療の治療反応性・治療予後との相関を認める遺伝子が解明され、加齢黄斑変性の個別化医療の実現が近づいた。

F . 研究発表

1. 論文発表

Kuniyoshi K, Sakuramoto H, Yoshitake K, Abe K, Ikeo K, Furuno M, Tsunoda K, Kusaka S, Shimomura Y, Iwata T. Longitudinal clinical course of three Japanese patients with Leber congenital amaurosis /early-onset retinal dystrophy with RDH12 mutation. *Doc Ophthalmol*. 2014 Jun;128(3):219-28.

Katagiri S, Akahori M, Hayashi T, Yoshitake K, Gekka T, Ikeo K, Tsuneoka H, Iwata T. Autosomal recessive cone-rod dystrophy associated with compound heterozygous mutations in the EYS gene. *Doc Ophthalmol*. 2014 Jun;128(3):211-7.

Ohkuma Y, Hayashi T, Sakai T, Watanabe A, Yamada H, Akahori M, Itabashi T, Iwata T, Noda T, Tsuneoka H. Retinal angiomatic proliferation associated with risk alleles of ARMS2/HTRA1 gene polymorphisms in Japanese patients. *Clin Ophthalmol*. 2014;8:143-8.

Katagiri S, Yoshitake K, Akahori M, Hayashi T, Furuno M, Nishino J, Ikeo K, Tsuneoka H, Iwata T. Whole-exome sequencing identifies a novel ALMS1 mutation (p.Q2051X) in two Japanese brothers with Alström syndrome. *Mol Vis*. 2013 Nov 24;19:2393-406.

Nakamura N, Tsunoda K, Fujinami K, Shinoda K, Tomita K, Hatase T, Usui T, Akahori M, Iwata T, Miyake Y. Long-term observation over ten years of four cases of cone dystrophy with supernormal rod electroretinogram. *Nihon Ganka Gakkai Zasshi*. 2013 Aug;117(8):629-40.

Sakuramoto H, Kuniyoshi K, Tsunoda K, Akahori M, Iwata T, Shimomura Y. Two siblings with late-onset cone-rod dystrophy and no visible macular degeneration. *Clin Ophthalmol*. 2013;7:1703-11.

Fujinami K, Tsunoda K, Nakamura N, Kato Y, Noda T, Shinoda K, Tomita K, Hatase T, Usui T, Akahori M, Itabashi T, Iwata T, Ozawa Y, Tsubota K, Miyake Y. Molecular characteristics of four Japanese cases with KCNV2 retinopathy: report of novel disease-causing variants. *Mol Vis*. 2013 Jul 20;19:1580-90.

Minegishi Y, Iejima D, Kobayashi H, Chi ZL, Kawase K, Yamamoto T, Seki T, Yuasa S, Fukuda K, Iwata T. Enhanced optineurin E50K-TBK1 interaction evokes protein insolubility and initiates familial primary open-angle glaucoma. *Hum Mol Genet*. 2013 Sep 1;22(17):3559-67.

2. 学会発表

原克典、赤堀正和、谷戸正樹、海津幸子、大平明弘、岩田岳 網膜中心静脈閉塞症におけるLOXL1遺伝子多型解析 第117回日本眼科学会総会 2013.4.4-7 東京

G . 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

